

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

300
44

昭和新選碑法帖大觀
第三輯第十卷

秦篆二刻石

始



300
44

秦篆二刻石





新昭

選味

碑

法

帖

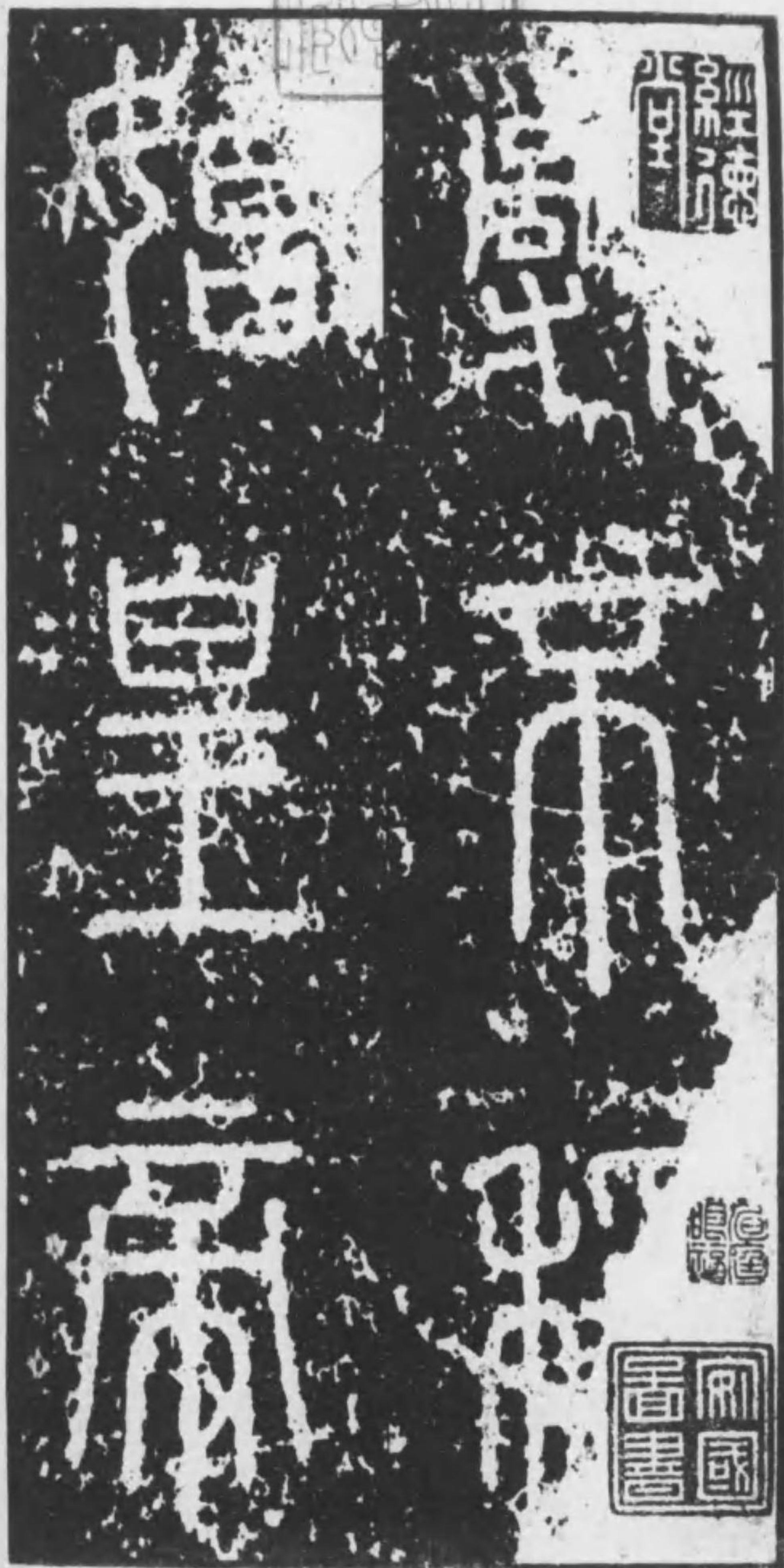
大

觀



第三輯
第十卷

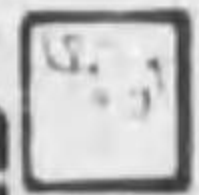
秦泰山刻石五十三字本



新州雷太
御書

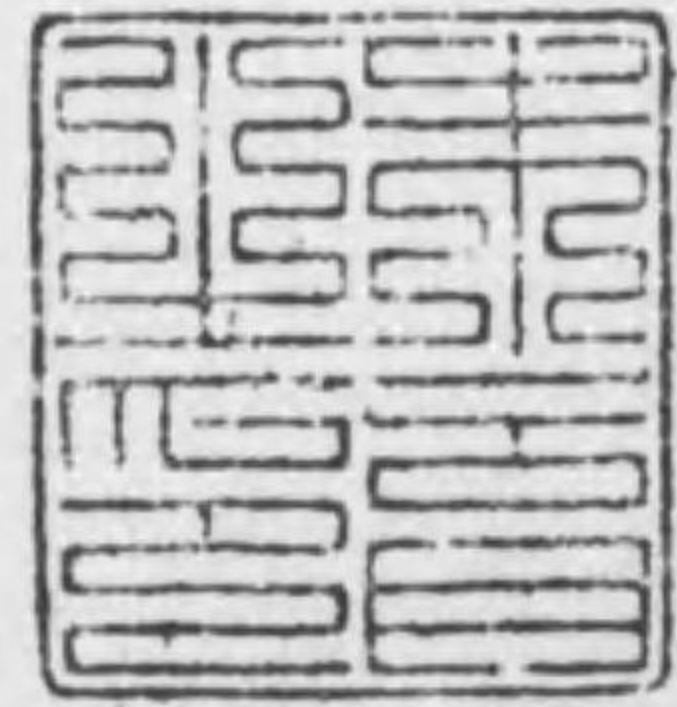


新州雷太
御書



新 聖
聖 齋
齋 齋

味 齋
齋 齋
齋 齋



前
不
請
金
味

金
國
國
國

秦瑯琊臺刻石



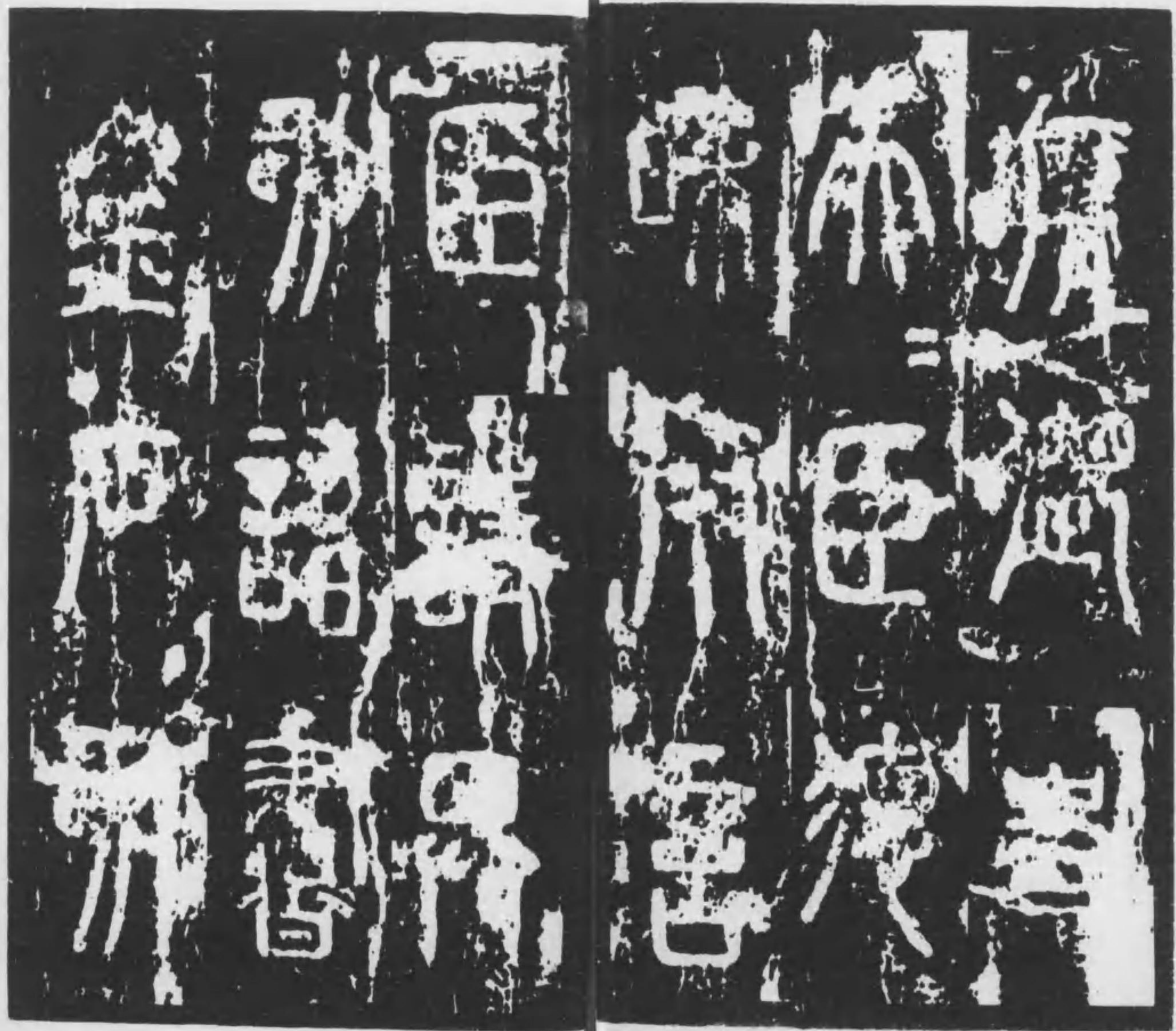
金 銀 銅
鐵 錫 鉛
汞 硫 磷

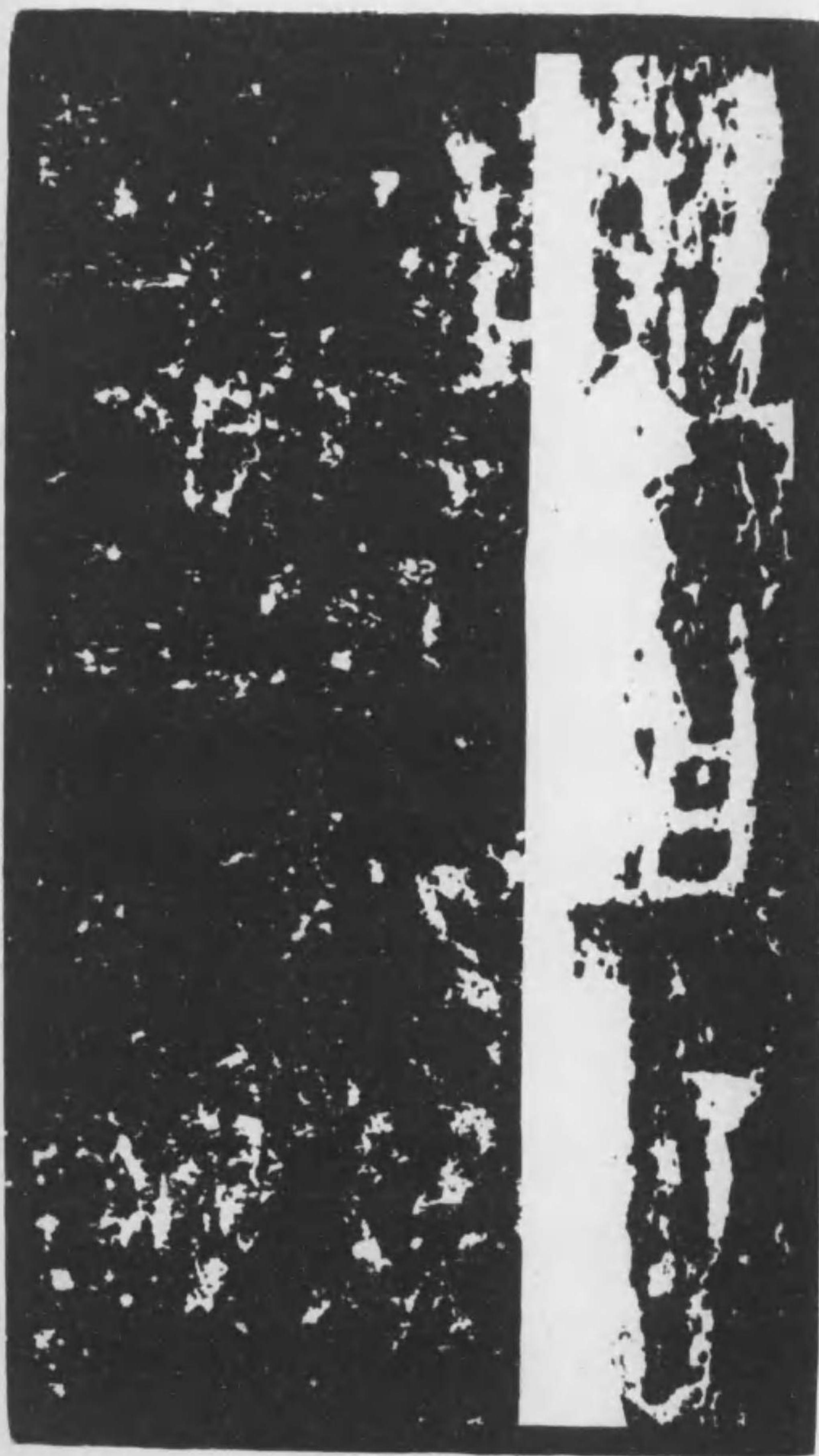
硝 磺 炭
石 油 鹽
磷 鐵 錫



新
臣
木
聖
細
臣
聖
生
神
木

聖
臣
木
聖
臣
木





泰山刻石五十三字本

駟

不

稱

始

皇

帝



其
終
久

遠
女
知

復
嗣
為

上
者
不

稱

成

功

忍

相

臣

斯

臣

忒

疾

御

專

亦臣

昧刑詔

臣請具

劾詔書

金
石
形

困
明
白

系
臣
味

初
請



五

帝

楊

楊

皇

帝

白

金

石

刻

畫

智
皇
帝

所
為
也

今
觀
跡

而
金
石

新
驛
不

稱
智
皇

帝
其
於

久
遠
也

知後嗣

易生者

不稱成

功盛德

丞
相
臣

斯
臣
咨

疾
御
史

亦
臣
德

昧

初

詔

臣

請

具

初

詔

書

金

石

初

困
囑
白

為
臣
味

刑
請

文
法
院



泰山刻石瑯琊台刻石解説

秦の始皇帝が芝罘瑯琊台等の地を巡幸して、泰山に登り、羣臣の請を容れて、石に刻して秦の徳を頌したのが、泰山刻石及び瑯琊刻石である。この外に秦刻として嶧山碑といふものがあるが、この碑は後魏の大武帝がこの山に登られた時、秦の暴政を惡み、人をして碑を倒させた。然るに書がよい爲め、拓本をさる好事者が頻りにこゝに來つて、人民に迷惑をかけたので、薪を碑の下に聚めて、野火で焚いた爲め、文字が全く解らなくなつたのである。

故に秦代そのまゝの文字を觀ひ得るは、泰山、瑯琊台二刻石あるのみである。秦代の篆書は小篆と稱して、周及びそれ以前の大家乃至籀篆とは、餘程その筆畫を異にしてゐる。而して後世説文篆として俗に篆書と稱せらるゝもの、元祖と見てよいもので、小篆研究としては、最も大切な参考品である。二刻石ともに李斯の書と傳へられてゐる。

磨泐破壊甚しく、泰山刻石の如きは、その殘字數十字乃至十數字のみ、而も、それすら、後世の摸刻と疑ふ人のある位である。瑯琊台刻石も亦剝泐甚だしく、見るべきものは十二行に過ぎない。十三行即ち五大夫楊樛の前に尙五大夫の殘字の存するもの及び末行に制曰可の三字が明晰なる拓本は、尤も得難きものとして珍重されてゐる。

李斯略傳

李斯は楚の上蔡の人なり。荀卿に従つて學成る。西秦に入る。始皇天下を併せて斯を以て丞相となす。大家を方ふるに字皆古體文を測るなし。斯遂に其繁冗を刪り、その宜しきに合するものを取り、小篆を爲る。

始皇六國を併せ、斯乃ち奏して秦文に合せざるものを罷じ、是に於いて天下之を行ふ。

泰山刻五十三字本釋文

辭不稱始皇帝其於久遠也如後嗣爲之者不稱成功盛德丞相臣斯臣去疾御史大夫臣德味死言請具刻詔書金石刻因明白矣臣昧死請

瑯琊台刻石釋文

五大夫關五大夫楊樛闕
皇帝曰金石刻盡闕始皇帝所爲也今襲號而金石刻辭不稱闕始皇帝其於久遠也如後嗣爲之者不稱闕成功盛德闕丞相臣斯臣去疾御史大夫臣德味死言臣請具刻詔書金石刻因明白矣臣昧死請制曰可



有所權取

昭和十三年十一月十五日印刷
昭和十三年十一月二十日發行

昭和十三年十一月十五日印刷
昭和十三年十一月二十日發行
秦篆二刻石

編著者 辻本勝己
發行所 大澤善吉

印刷所 玉石社 玉木印刷所
發行所 東京 寧樂書道會

300
44

300

44

終